

SCREAMING CRY

written by HADEYA

SCREAMING CRY

1

忘れられない人がいる。忘れようとする程、頭から離れなくなる。
人はそれを〈運命〉と言う。
運命の存在を私は信じる。確実にそれは存在しており、抗いようがないのだ。

*

ドアが開くと、目の前にデイブ・クラインが立っていた。思わず、目をパチクリさせた。
「デ、デイブ？」
デイブはエレベーターの壁際に立つ、エージェントの喉仏に右手刀を打ち込んだ。
前のめりになった彼を壁に抑え付ける。
「何の取引か言うんだ……言え……言え、早く！」

カウントダウンが始まる。静かに、静か過ぎるくらい静かに始まる。

政府が秘密裏に開発を進めた植物兵器——滑らか系。
襲われると脳に侵入し、神経を直結して脳信号を他者の脳に伝搬する。結果として、全人類は完全に回路と化し、ある都市へ運ばれる事になる——
「マシンシティに。その技術を俺が盗んだ。何故か——」
デイブの脳裏をフラッシュフォワードが掠める。見慣れない風景……電影の中、デールが問う。
「何故、あの時、私を助けたの？」
デイブは告げた。きっぱり、と。
「生贄だったからだ。君が」
デイブは彼女を見詰め、キスを交わした。熱烈に、かつ情熱的に。
「一目見た時から君が好きだった」
「……私も」
我に返る。俺は今、エレベーターの中でエージェントを追い詰めている。

電影が脳内を流れる。めくるめく。ニューロンの中、俺と彼女は愛し合っている。激しく、燃えるように。
デール……彼女も俺を愛している。俺たちは夢中だ。幸せの只中にいる。
笑った。俺が笑う事など滅多にない。こんなにも嬉しいと感じたのは初めての事だった。

彼女は俺を見ている。その目は愛を告げている。熱い熱い愛を。ふいに眼差しが変わる。愛から恐怖、恐怖から絶望へ、と。

一瞬の出来事——振り返ると、室内にはターミネーターがいた。

俺の首は一瞬で跳ねられた。

デールが腹の底から絶叫する。転がった生首は朦朧とする意識で彼女を見ている。

デールはなお愛を信じている。信じて疑わない。そんな事、ある訳ないと信じ。

.....事実はもっと悲惨だ。二人に待ち受けるのは痛烈な過酷。恐怖に表情が引き攣り、金切り声を上げながら惨殺される。意外な者.....予想だにしない伏兵に。それまでの間、極短期間、二人は燃える。燃えるように愛し、その愛は永遠に引き裂かれる(運命)にあるのだ。

*

飛び起きた。

悪夢を見て、泣いた。慰められ、ワンワン泣いた。

やがて、ドアがノックされた。ノックするのは俺たちを追う者に決まっている。一体、俺たちは何から逃げているのか。殺人機械——ターミネーターに他ならない。

それでも俺たちは諦めない。ベランダに出て、備え付けられた鉄柵を乗り越える。

「行くぞ」

デイブは言った。デールは困惑している。

「だって、ここ7階だよ！」

「俺を信じるか？」

「.....信じる」

デイブは非常用梯子を滑らせた。それで一気に一階まで降りる。その後は.....頭の中、段取りが固まって行く。

しかし現場は段取り通りには運ばない。

室内のドアが蹴破られた。俺は理解した。何もかも。先程の夢が現実になりつつあるのだ——破滅の未来が。しかし俺は彼女を失いたくない。失いたくないモノは失いたくないのだ。

咄嗟に俺はデールを抱えたまま背面を向き、飛び降りた。七階のベランダから。滞空時間は.....長かった。とてもとても長かった。

俺たちは熱烈なキスを交わした。夢の中で、至る所で。

俺は真剣だ。100パーセント、彼女を愛している。真剣だからこそ——

アスファルトに激突した。

激痛が全身を突き抜ける。そこへ黒いセダンがスキッド音を鳴らし、急停車する。最も信用する捜査官——Kの運転する公用車が。

Kは叫んだ。

「クライム刑事、乗って下さい！」

クラクションを鳴らし、公用車が行く。道路を横切り、反対車線へ飛び込んで行く。時刻は夕方。本当の闘いが始まろうとしている……。

最愛の女性——デールは俺を見ている。後部座席で。俺も彼女を見ている。逆に言えば、俺たちは〈今〉しか見えていない。

未来など知った事か。俺と彼女に破滅が待っているなら受けて立つ。正々堂々、受けて立つ。

「……大丈夫？」

彼女が尋ねた。デールが。俺たちは熱烈なキスを交わした。燃えるような、マグマのキスを。その味は——

公用車が行く。一般道を逆走し、そのまま側道へ突っ込んだ。

なお続く二人の運命。公用車はグングン加速しながら夜の雑踏へ消えた。

2 SCREAMS

1

雑居ビルの中、フロアを突き進む。エージェントを挙げる為。

エレベーターのボタンを押し、待つ。その瞬間を。

ふと昔の会話が蘇る。俺自身の抱く妄念が。

「運命、あると思う？」

デールは言った。恥ずかしくて言えない台詞を惜しみなく言う。言いながら至福の余韻に浸る。

「俺自身は……あると思う」

「根拠は？」

デイクは考えた。その視線はデールの目から離れない。

「例えば、今、こうして俺たちがここにいる理由。それって否定できないだろう？」

何か隠している。デールはピンと来た。どこそれとなく話題を振る。

「過去が知りたいな」

「何で今、そんな事を？」

「別に。ただ知りたいだけ」

「……」

「私ね、本当はデザイナーになりたかったの」

「何故、ならなかった？」

「センスがなかったから。デイクは何になりたかったの？ 小さかった頃」

「会社員」

即答だった。今なおデイクはデールから目を離さない。会話が続く。

「どんな会社員？」

「広告代理店」

「何で広告代理店に？」

「広告代理店には一貫性がある。ニーズもあるし、食いつ逸れない」

「ふうん」

「アート・スクールか何か通ったのか？」

「まあね。私、世界の事が学びたかったの。でも——」

デールも目を離さない。

「——全て学んじやった」

「本当に全てか？」

「だと思う」

デイクが起き上がり、冷蔵庫に缶ビールを取りに行った。デールが煙草に火を点ける。白煙を吸い込み、天井に向け、綺麗な輪を吐き出す。

デイクが戻って来た。デールの前に腰を降ろす。開栓しながら無意味な事を呟く。

「首が痒いんだよな。後ろ首、この辺」

デールが右手で後ろ首に振れる。本来、左利きのデールが。

「少し腫れてる。蚊に食われたんじゃない？」

「聞いているな、日比野枯渴？」

デイブが唐突に切り出した。一体、デイブは誰に向かって話し掛けているのか。空中から解答が返ってくる。

「聞いているよ。ぜ～んぶ。宇宙全域に生中継だぜ。どこから聞いているかは想像が付くよな？」

「ここだろうが」

デイブは枕元のサブレッサーが装着されたピストルで迷わず、トリガーを引いた。彼女———デールの額へ向け。即死。デイブは彼女の目を見ている。見開いた目は「愛している」と告げている。貴方を心の底から愛している、と告げている。

*

そこで飛び起きた。

「悪夢？」

「.....ああ」

デイブはデールの目を見た。その目は愛している、と告げている。溜まらなく愛おしい、と告げている。

「愛してる」

「俺も.....」

デイブはトイレに向かった。便座に腰を降ろすと涙が溢れた。声を押し殺して泣いた。そのままシャワーを浴び、スーツを着用した。二人は他愛ない会話を交わしていた。

デイブが深呼吸を一つする。枕元のピストルを取り、サブレッサーを外すと、二人はマンションを後にした。

———デイブは告げた。

「反撃に出よう」

「愛してる」

「俺も.....俺も愛してる」

二人はキスを交わし、マンションを後にした。

*

エレベーターのドアが開く。中には俺の〈未来〉が広がっている。

背後には.....そして過去には———

一斉に押し寄せる〈滑らか系〉.....つまり最新の植物型ターミネーターの一群。

ドアが開くと、目の前にデール・フラジャイルが立っていた。目をパチクリさせている。

「デ、デイブ？」

.....忘れられない人がいる。忘れようとする程、頭から離れなくなる。
人はそれを〈運命〉と言う。
運命の存在を私は信じる。確実にそれは存在しており、抗いようがないのだ。

構うものか——俺はデールを感じながら渾身の力でエージェントの喉仏に右手套を打ち込んだ。

.....その後の未来を俺は知っている。だから、どうした？ 例え俺たちの愛が引き裂かれようと俺は、俺たちは正々堂々、受けて立つ。

俺はデールを愛している。デールも俺を愛している。
未来など知った事か。果たすべきを俺は果たす。

デール・フラジャイルと言う生贄を守って見せる。永遠に。永遠に.....。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872